

# 飛鳥時代における朝鮮半島系土器の生産とその背景

小池 寛

## 1. はじめに

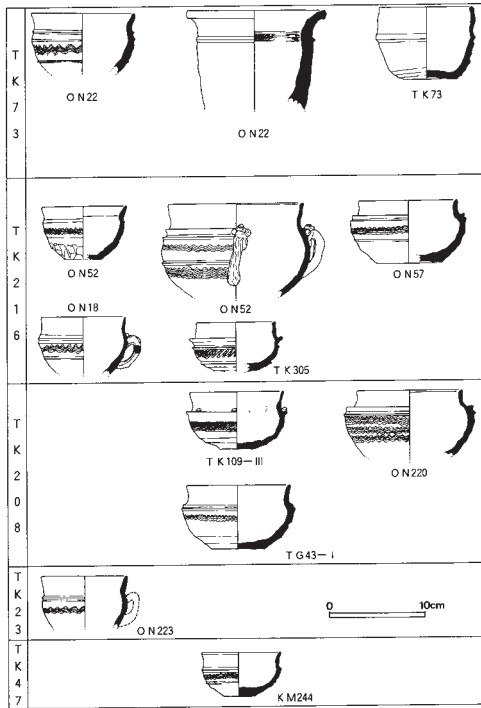
いわゆる飛鳥時代の土器研究については、大阪府陶邑古窯址群の発掘調査により生産地における須恵器の編年的研究が体系化される一方、土師器については、奈良県飛鳥地域における都城や寺院の調査により、飛鳥1～5期の5時期に細分化され、消費地での編年的研究が確立された。これらの双方向からの研究は、出土した土器が単に検出遺構の相対的年代を決める基礎資料として評価されるばかりでなく、仏教文化や律令的土器様式が中核的地域から周辺地域にどのように浸透していったかを検討するうえで非常に重要な指標となっている。

本稿では、飛鳥時代の須恵器のなかでも把手付椀に焦点を絞り、その生産と流通の実態を把握し、器形的な起源と国内生産に至った背景について考察するとともに、当該期の須恵器研究の問題点について私見を述べることを目的としている。

## 2. 須恵器、把手付椀の消長変化

国内における須恵器生産は、朝鮮半島陶質土器の直接的な影響を受け、概ね4世紀末期から5世紀初頭に開始される。初期須恵器には、蓋杯や高杯などの小型器形をはじめ器台や壺、甗などの中型器形が主流を占めながら、大甕も一部の生産地で生産が開始されている。そのなかにあって、把手付椀は、須恵器生産開始期以前の古式土師器には認められず、初源期の須恵器以降に認められる器形であることから、後述するように陶質土器を祖型として国内に定着したことが<sup>(註1)</sup> 確実視できる土器資料である。

現時点で陶邑古窯址群の最古型式とされるTG232型式併行期には、すでに把手付椀が確認されており、それ以降の陶邑編年TK73からTK47型式併行期には、各々、数量的な違いがあるものの、<sup>(註2)</sup> 継続して生産されることが確認されている。全体的な傾向としては、口縁部下の稜線が鈍くなり、体部最大径部に施される波状文も粗雑になるなどの形骸化が認められる。陶邑古窯址群においては、TK47併行期以降の窯では確認できない器形である。また、消費地においては、陶邑編年MT15型式併行期に僅かに確認例が報告されているが、基本的には陶邑編年TK47型式併行期以降には生産されない器形として認定す



第1図 古墳時代碗編年表

る。しかし、分類上、同一器種名を冠してはいるが、以下の状況から系譜的には同一組列上には位置づけられないことが確認される。以下、国内において出土している典型的な碗及び把手付碗の出土事例について概観しておきたい（第2図）。

1・2は、陶邑古窯址群 TG64 号窯から出土した台付き鉢である。直接的には把手付碗とは関係しないが、確実に陶邑編年 TK217 型式併行期に比定できる資料群である。当該期には、稜碗や佐波理碗に代表される金属器を起源とする須恵器や土師器が出現する時期であり、金属器碗の模倣により成立した器形と捉えることができる。体部外表面中央に二条の稜線を有することも金属器に共通する特徴である。

3は、陶邑古窯址群 TG68 号窯から出土した棒状把手を有する碗である。当該資料と同じ把手を有する碗は、それ以前には認められないが、短い角状の把手をもつ鉢が須恵器や土師器などに認められることから、今まで同一系譜上に位置付けられることが一般的であった。しかし、体部の形状や把手の形状の著しい相違点から同一系譜にはないことは明瞭であり、棒状の把手付碗は、やはり飛鳥時代以降に生産され始めた器形として捉えうる状況下にある。

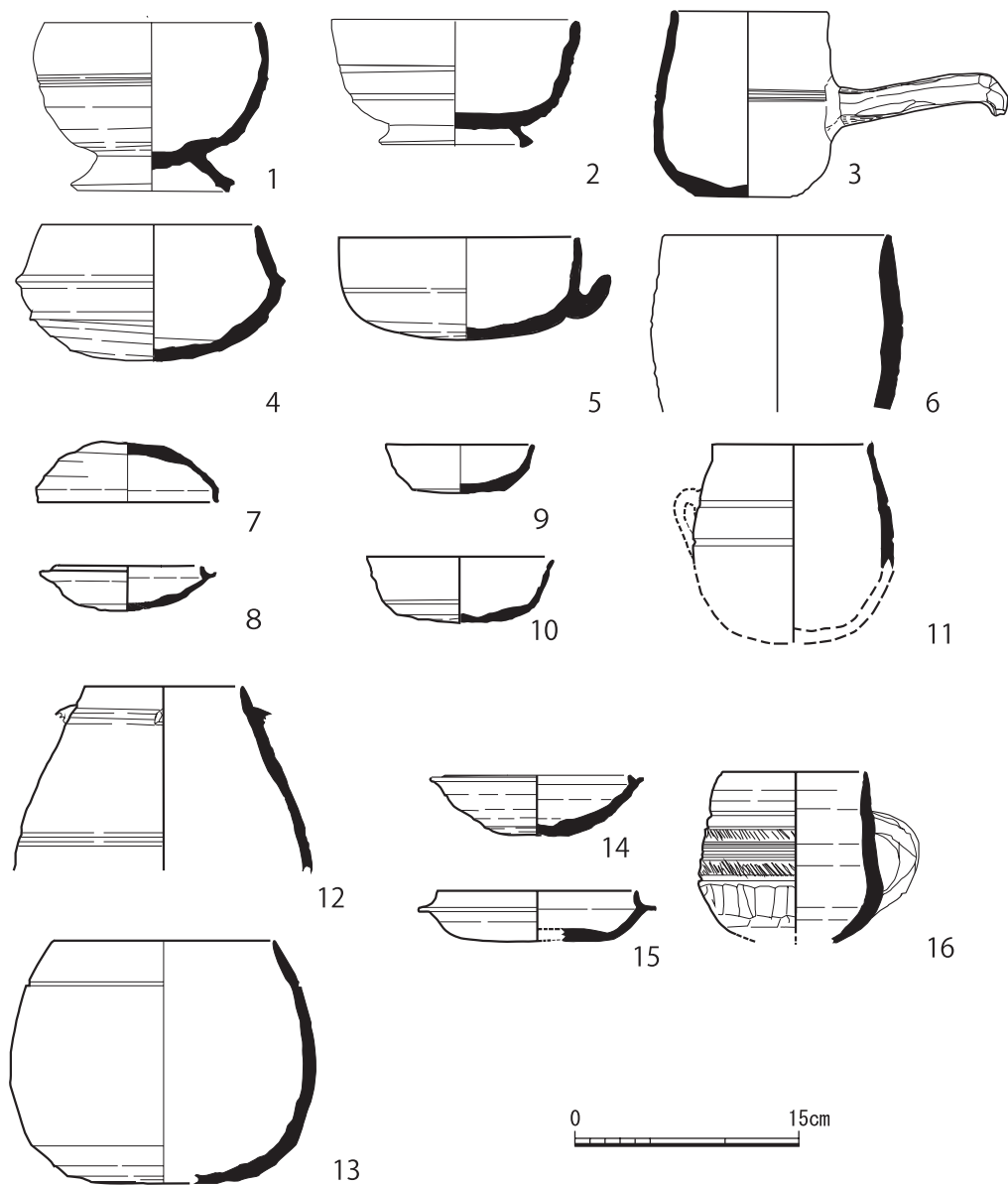
4は、滋賀県甲西町正福寺遺跡から出土した碗である。蓋杯の系譜引く器形的特徴を有

ることができる。<sup>(注3)</sup>

国内において概ね古墳時代中期末において把手付碗の生産を停止する蓋然性の高い要因については判然としないが、古墳の埋葬施設への須恵器多量副葬や葬送儀礼の変化などが背景にあったと考えられる。なお、提瓶の出現期に把手付碗が消失する現象は、埋葬施設から出土する把手付碗などの属人器を副葬する意義が希薄化し、共同飲食に供する器種の副葬が盛行することとも密接な関係を有していると考えられる。<sup>(注4)</sup>

### 3. 飛鳥時代の把手付碗

先に述べたように、古墳時代中期末以降、国内において消失する把手付碗は、飛鳥時代に再び生産と流通が開始される。



第2図 飛鳥時代、須恵器碗集成

しているが、検出遺構からの供伴土器から陶邑編年TK 217型式併行期に比定できる。後に述べるように飛鳥時代に成立し、その後、飛鳥・白鳳時代の短期間に生産される器形である。

5は、奈良県高取町丹生遺跡から出土した角状把手をもつ鉢である。古墳時代後期に当

該資料より深い土師器の鉢がみられるが、体部外面中央に一条の稜線を有し、形態的にも同一系譜上には位置付けられない器形である。当該資料は、飛鳥時代以降に生産と流通が始まる器形である。

6は、陶邑古窯址群 TK41 号窯から出土した鉢である。供伴土器から陶邑編年 TK217 型式併行期に比定できる資料である。体部下半を欠いており、全体の形状は不明であるが、体部上位外面に稜線をもつ特徴がある。酷似する形態的特徴を有する鉢は、京都府宇治市隼上り窯跡群の出土例においても確認できる。

7～13は、宇治市隼上り瓦窯跡群工房址から出土した土器群である。7～10の蓋杯は、飛鳥2～3型式に比定できる土器であり、11～13の鉢類も同時期に比定できる条件下にある。11は、体部中央外面に把手を貼付ける位置を示す稜線が二条施されている。把手は欠損しているが、当該土器以前には確認できない器形的特徴を有している。また12は、11と比べて口縁部が著しく窄まった特徴を有している。口縁部直下に把手を付した痕が残存している。11にみられるように、体部に施された稜線が把手の位置を示すものと仮定すると、把手付碗として器形認定できる資料である。13は、口縁部下に一条の稜線を有する鉢である。碗とするには、口径と器高の比率に著しい相違点がある。

14～16は、京都府京丹後市裾谷遺跡 S B 4 出土資料群である。陶邑編年 TK217 型式併行期に比定できる土器である。16は、半環状の把手が付く碗である。外面には、稜線やへら状工具による刺突文、へら削りが見られる。外面には赤色顔料が塗布されており、日常で使用された容器ではなく、何らかの宗教性を帯びた用途と捉えるべき資料である。以上が、把手付碗とそれに類する器形の概観である。基本的には、陶邑編年 TK217 型式併行期以前からの系譜上には位置づけられない器形であることが明らかになった。掲載した関係土器は、生産地及び消費地から出土した資料のごく一部であるが、その用途については、今後の課題としておきたい。なお、赤色顔料が塗布された裾谷出土例は、何らかの宗教的な用途を示しており、飛鳥時代の把手付碗の使途を復原するうえで示唆的である。

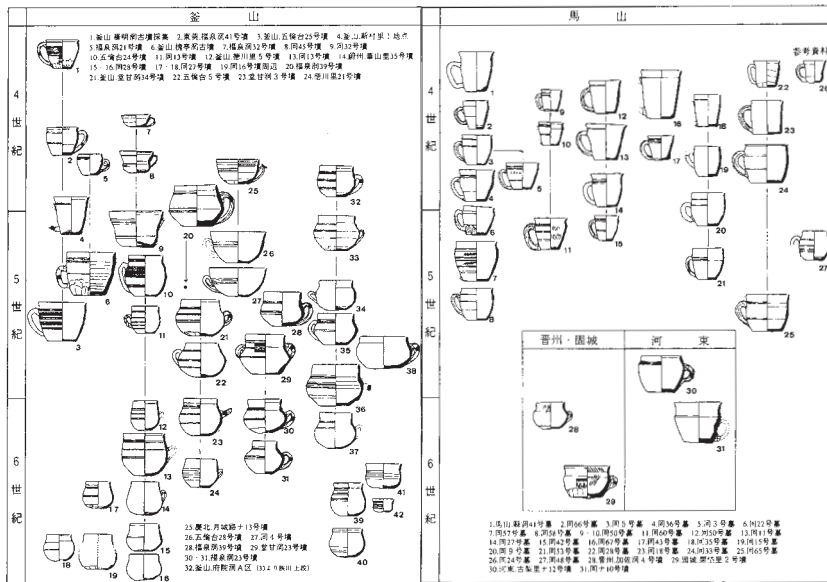
#### 4. 朝鮮半島における碗及び把手付碗

日本国内で生産された須恵器は、朝鮮半島の陶質土器の強い影響を受けていることは、広く周知された事実である。前章で述べた日本国内の把手付碗の系譜を考えるうえで、朝鮮半島の事例について、その全容を概観しておきたい。

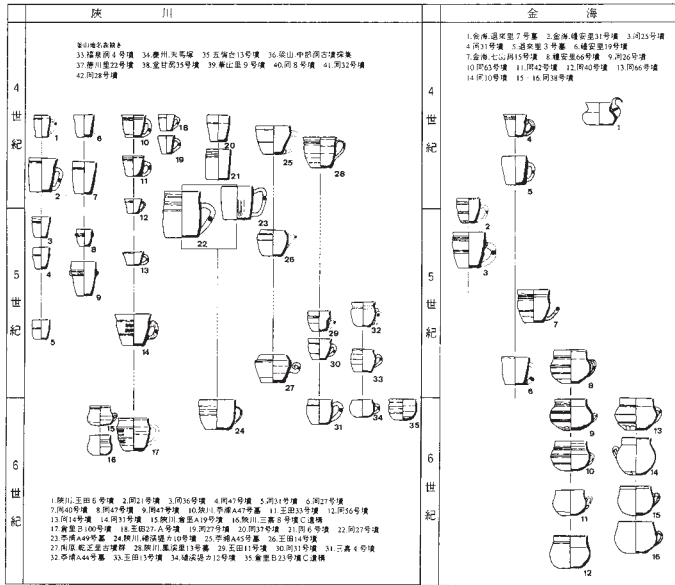
朝鮮半島における把手付碗は、伽耶地域と百濟地域における地域差が顕著であるが、伽耶地域内においても、様相の異なる把手付碗が散見される。それらを総合的にみた場合、以下の2類に分類することができる。まず、直線的な体部と口径よりやや小さい底部から

なる、いわゆるジョッキ形を呈するA類と球体を呈する体部と頸部から直線的に上方に立ち上がる口縁部を有するB類に分類することができる。基本的にはA類が先行し、地域によって出現する時間差はあるもののその後、B類が後出する傾向は一致している。ここでは馬山、釜山、金海、陝川、昌寧、大邱、義城、慶州、百済地域を中心に、A類からB類に移行する時期を中心に整理しておきたい。<sup>(注6)</sup>なお、朝鮮半島から出土している把手付碗は、一埋葬施設に基本的に一個体の副葬であることから、属人器として副葬されていることが確認されている。その影響受け、日本国内の古墳時代中期の副葬も一個体の副葬が最も多い要因となっていることは、当時の葬送墓制を考える上でも重要である。

馬山地域の代表的な墳墓調査例として縣洞墳墓群をあげることができる。同墳墓群では良好な把手付碗の出土例が数多く確認されている。基本的に4世紀代にA類が副葬されるが、5世紀初頭の同48号墓(第3図右表27)のB類を除いては、5世紀中葉までA類が副葬され、典型的なB類は極めて少ない状況である。釜山地域では、数多くの墳墓が調査されており、把手付碗の良好な出土状況が確認されている。馬山地域同様、A類が先行して副葬されているが、4世紀末から5世紀初頭にはB類の副葬が確認される。最も新しいA類の副葬は、5世紀中葉の五倫台25号墳(第3図左表3)である。一方、B類は、6世紀末の蔚州華山里28号墓例(第3図左表15・16)を最も新しい事例として副葬されていることが確認できている。なお、6世紀後半の碗には、把手自体が消失しているものの、体部外面の沈線は残存している。金海地域では、5世紀後半までA類の副葬が確認でき、



第3図 陶質土器馬山釜山編年表

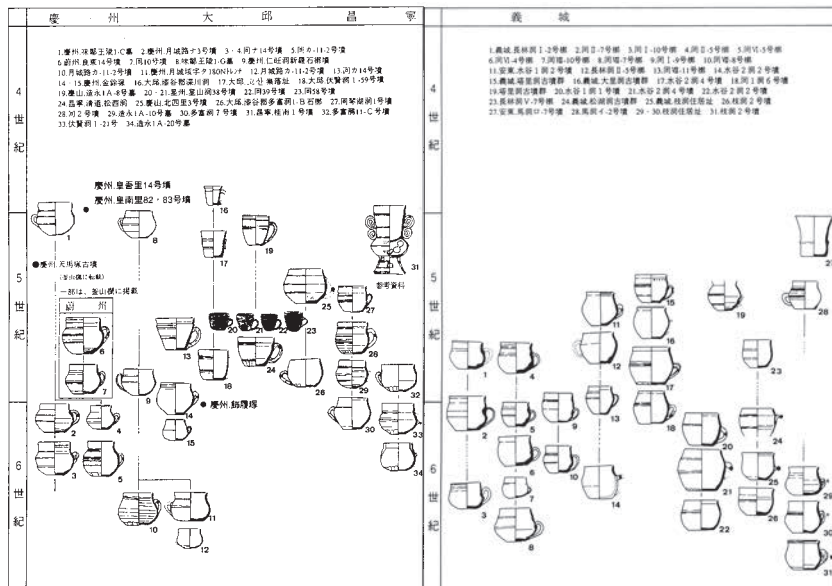


第4図 陶質土器 陝川金海

B類は、5世紀後半から造墓が始まる禮安里古墳群（第4図右表）において良好な椀の副葬が報告されている。釜山地域で見られるように、6世紀末には把手の消失した椀が主流を占めていることがわかる。陝川地域では、4世紀中葉から5世紀後半にかけてA類の副葬が主流を成し

ているが、B類は、6世紀初頭に築造された倉里A 19号墳（第4図15）において確認されている。当該地域では、6世紀前半以降の把手付椀の副葬は見られないが、6世紀前半までA類とB類が混在して副葬される地域の特徴は他地域に比べ顕著である。

一方、昌寧地域では、A類の副葬は見られないが、B類は5世紀中葉以降に顕著に見



第5図 陶質土器 慶州義城

られる。また、大邱や慶州においてもB類が主流であるが、5世紀後半の大邱伏賢洞1-59号墳（第5図左表18）においてにおいてA類の出土が見られる。慶州では、現時点ではA類の出土は見られず、6世紀後半の月場路カー11-2号墳（第5図左表10）から把手付椀が出土している。

義城地域では、A類の出土は見られない一方、B類は、5世紀中葉から6世紀末まで認められる。基本的には、把手付椀から把手を持たない椀へと変化していることがわかる。

最後に百済地域について概観する。同地域では、口径と器高に比率が異なるA類の出土が清州新鳳洞10号墳（第6図1）から出土しており、

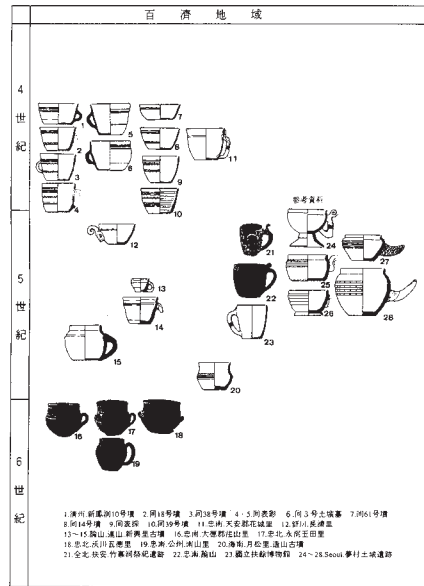
その傾向は、5世紀中葉まで継続している。一方、B類は、5世紀末から6世紀にかけて良好な椀が出土しているが、6世紀中葉以降での副葬は見られない。

以上が朝鮮半島における把手付椀A類とB類の移行時期を中心にみた傾向である。最も重要な点は、地域によって異なるものの5世紀中葉前後にA類からB類に移行することが確認できる点。そして、6世紀末までB類の副葬が見られ、把手付椀から把手を持たない椀へと移行することが把握できた点をあげることができる。

### 5. 飛鳥時代における把手付椀出現の背景

538年には仏教が伝来し、562年には任那が滅亡する。610年には高句麗から絵具や紙、墨などが伝わる。その間、遣隋使の派遣などを通して、大陸文化を急速に取り入れようとする政策が遂行される。645年には、そのもの自体には疑義が残るが、何らかの政治的変革を象徴する大化改新を迎え、663年には白村江の敗戦に伴い百済が滅亡するなど東アジアを舞台とする国際交流が盛行する時代を迎える。これらは668年以降に盛んになる遣新羅使へと引き継がれ、朝鮮半島を中心とする交流により多くの文物が国内に伝わることとなる。

飛鳥時代の土器生産は、これらの交流を通して伝えられた佐波理椀に象徴される金属器の模倣が盛んに行われることによる変革が主に論じられることが多かった。しかし、模倣の対象となったのは金属器だけではなく、同時代に朝鮮半島で生産されていた陶質土器の



第6図 陶質土器 百済

一部の器形もその対象になっていたことが明らかになった。全ての器形が模倣の対象にあった訳ではなく、取捨選択されたうえ、模倣されるに至った。把手付椀などの模倣が行われた背景には、単に器形の模倣ではなく、把手付椀などが有する宗教性なども同時に受け入れた結果ではないかと考えられる。668年以降に頻繁に派遣された遣新羅使による国際交流の布石としての飛鳥時代の国際交流を考古学的に多方面から検証することは、須恵器の器形における消長変化の要因を考えるうえで欠かすことのできない研究となることは必至であろう。

最後に、国内において初期須恵器の段階から5世紀末まで主に副葬品として使途される把手付椀は、朝鮮半島では4世紀以降6世紀に至るまで連綿と生産と流通が行われたことが明らかになっている。日本国内で新たに別系譜として生産と流通が始まる事実は、須恵器編年の系譜を単純に系統化するのではなく、器形毎、時代毎に検証していく必要性を示唆している。改めて須恵器の各器形の消長変化を捉え直すことにより、当時の土器生産のあり方全体を見直す機会になることを提起し、結びにかえたい。なお、日本国内における把手付椀の集成を行うことにより、把手付椀に付加された概念を正確に追求することができる点については、今後の課題としておきたい。

(こいけ・ひろし＝当調査研究センター調査課参事企画調整係長事務取扱)

注1 小池寛「須恵器・椀に関する基礎研究 -生産地を中心にして-」(『京都府埋蔵文化財論集 第3集』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)1996

注2 注1に同じ

注3 注1に同じ

注4 小池寛「陶質土器、盃の出土状況」(『あまのともしび-原口先生古稀記念集-』原口先生の古稀を祝う集い事務局)2000

注5 小池寛「陶質土器の起源について-盃を中心にして-」(『堅田直先生古稀記念論文集』真陽社)1997

注6 小池寛「陶質土器・盃に関する基礎研究」(『古墳文化とその伝統』勉誠社)2008(第3～6図転載)

※把手付椀の朝鮮半島ならびに日本国内における出土遺跡に関する文献は割愛した。